

F 8 - 0 1

研 究 報 告 第 1 2 号

学校不適應の子どもへの支援の在り方
～ 子どもの居場所の実態調査を踏まえて ～

平成 2 6 年 3 月

千葉県子どもと親のサポートセンター

序

近年、いじめや不登校、発達上の課題等、教育課題は複雑化・多様化し、社会的に大きな関心を持たれています。子どもと親のサポートセンターでは、悩みを抱える子どもや保護者の相談、子どもが安心して過ごせる場づくりや保護者同士の語らいの場を提供する他、学校が抱える生徒指導上の諸問題解決を支援するため、教職員に対して必要な援助を行う、学校・関係機関支援を行っています。

学校・関係機関支援として、県内各地の学校や教育支援センター等に伺うと、学校不適應の子どもへの対応として様々な取組がなされていますが、子どもを取り巻く要素が複雑に絡み合い、適應の難しい状況があるのも事実です。支援者の関わり方によって子どもの状態は大きく変化するため、学校不適應の子どもの支援には、日頃から支援者が子どもの見立てと、一人一人に寄り添った対応を適切に行うことが求められます。

本研究では、学校や教育支援センター、民間関係機関などの実態調査を通して、子どもの支援者の現状と課題をあらためて把握し、学校不適應の子どもへの、より効果的な支援の在り方を探りました。当センターでは、子どもの居場所の実態を踏まえ、これまでの学校支援を振り返り、より質の高い支援事業を目指し、支援の充実に必要な視点をまとめました。この視点は、必ず学校や教育支援センターでの支援にも役立つものと考えています。

本研究報告書では、研究の過程において、聞き取り調査や視察を通して得られた優れた実践例も紹介しています。是非、今後の支援の参考として御活用いただければ幸いです。

本研究を進めるにあたり、研究の方向性等、御指導いただきました千葉大学教育学部准教授 磯邊 聡 様、アンケート調査や聞き取り調査に御協力いただきました皆様、また、研究協力校及び機関として御協力いただきました方々に、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

千葉県子どもと親のサポートセンター 所長 黒岩 明

目 次

I	主題設定の理由	1
II	研究の方法	2
III	研究 1	
1	実態調査	
(1)	アンケート調査	2
(2)	聞き取り調査	19
(3)	考察	29
2	学校支援	34
(1)	学校支援実績	
(2)	考察	35
IV	研究 2	
1	4つの視点に着目した視察	36
(1)	M小学校の実践	
(2)	N中学校の実践	38
(3)	O高等学校の実践	41
(4)	P高等学校の実践	42
(5)	Q教育支援センターの実践	43
(6)	R教育支援センターの実践	44
2	学校支援を通じた実践	46
V	総合考察	51

学校不適應の子どもへの支援の在り方
～子どもの居場所の実態調査を踏まえて～

I 主題設定の理由

文部科学省の「平成22年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によると、小・中学校における不登校児童生徒は約12万人で、前年度より約3千人減少したものの、小学生は微増の傾向にある。また、高等学校における不登校生徒数は約5万6千人で、前年度より約4千人増加している。千葉県においても同様の傾向が見られ、小学校における不登校児童数と高等学校における不登校生徒数は増加している。（なお、平成23年度調査においても同様の傾向が続いている。24年度は千葉県では全校種で微減。下表参照。）

各学校においては、学校不適應の改善に対する対応や支援を行っているものの、依然として、小1プロブレム、中1ギャップ、高1クライシスといった学校種が変わる時の不適應や、発達上の課題、コミュニケーション能力の乏しさや、人間関係上のトラブル、家庭の学校に対する考え方の多様化など、さまざまな要素が複雑に絡み合い、学校に適應できない児童生徒が増えている実態がある。なお、高等学校の授業料無償化などの制度上の変化が、進路変更への決断を鈍くしている状況もある。

こうした中、ある者は不登校となり、また、登校しているものの集団活動に参加できず保健室や別室登校、あるいは、教育支援センター等への通所をはじめ、さまざまな居場所で支援を求めている児童生徒も少なくない。

支援事業部では、学校支援・関係機関支援等の不登校対策のための事業を通じて学校不適應の子どもへの支援を行っている。子どもを取り巻く状況はさまざまで、支援者の関わり方によって子どもの状態は大きく変化することがあり、学校不適應の改善には、日頃から支援者が子どもの状態を適切に見立て、一人一人に寄り添った適切な支援を行うことが求められている。

そこで、子どもの居場所の実態調査を行い、状況を明らかにするとともに、それぞれの居場所での子どもの支援者の現状と課題を把握し、学校不適應の改善に向けた、子どもの支援者への支援の在り方を探るため、この主題を設定した。

なお、本研究において学校不適應とは、「学校における集団活動や学業等に適應の困難さがあり、本人や周囲の人が苦しんでいる状態」とし、不登校等の長期欠席に限らず、別室登校や登校渋り等、欠席が30日以上にはならないが休みがちである状態を含むものとする。

参考：不登校児童生徒数の推移（「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」より）

